

コンテンツツーリズムをめぐる ローカル・アイデンティティの変容とコミュニティの再構築

八巻 恵子

Reconstruction of Local Identities and Community
by Contents Tourism

Keiko Yamaki

論文要旨

コンテンツツーリズムによる観光まちづくりは、コンテンツ・ファンが喜ぶような物語空間を、行政、地域住民、企業が協力して成立させようとするものである。岡山県倉敷市真備町のまちづくり活動の事例では、地域住民が活動に参加することを通じて自らのローカル・アイデンティティが変容し、地域を読み替えようとするダイナミズムが生まれた。

Regional development by content tourism is to create diegesis to please fans in cooperation of the local administration, residents, and enterprises. In the case of Mabi-cho, Kurashiki-shi, Okayama Prefecture, local identities of residents were reconstructed through their activities, and dynamism was created for them to read the region.

キーワード：コンテンツツーリズム、岡山県倉敷市真備町、横溝正史、金田一耕助

KEYWORDS: Contents Tourism, Mabicho, Kurashikishi, Okayama, Seishi Yokomizo, Detective Koichi Kindaichi

1. はじめに

本研究は、コンテンツツーリズムへの住民参加による地域振興と、地域住民のローカル・アイデンティティとコミュニティの再構築のダイナミズムについて、岡山県倉敷市真備町の横溝正史文学を巡るスモールツーリズムの事例から明らかにしようとするものである。

コンテンツツーリズムを導入する観光まちづくりは、コンテンツ・ファンが喜ぶような世界観と物語空間を、行政、地域住民、企業などが協力して成立させようとする。イニシアティブを取る主体が誰かによって、ツーリズムの性格が違ってくることがあるが、多くのケースでは陰の立て役者であるところの「文化の仲介人^{フローカー}¹(Nash 1989)」が、ステークホルダー間を調整している。地域住民

によるホスト役の受容と、彼らのコンテンツ・ファンの観光行動についての理解が進むにつれて、地域住民のローカル・アイデンティティが変容することがあるのは、地域外から「見られる」立場であることに気づかされるからである。自分たちのことを「見ている」地域外のファンや企業、メディア報道と、それらをつなぐ行政との関係性の構築を、まちづくり活動を軸に、観光者を迎えるホストとしてのアイデンティティの変容が地域コミュニティの再構築を促し、地域をイノベティブに読み替えるダイナミズムとなっている。

2 コンテンツツーリズムとまちおこし

物語を巡る旅は、古来より宗教巡礼をはじめとして人類普遍に見られるものであり、日本においても伊勢参りや熊野古道、四国遍路はこんにちも続いており観光地としても人気が高い。他の例では、伝説や伝承のある場所、戦争や自然災害、事件や事故などの悲劇が起きた場所などには、神社や石碑などの記号的な装置が設置されていることが多く、語りにまつわる特定のスポットを訪れる旅も繰り返されてきた。

メディアの多様な発達に伴って、映画やテレビ番組などの映像による物語の情報発信力が高まると、撮影が行われた場所や、ドラマチックなシーンが演じられた場所に訪れることで、物語を二次的にも楽しもうという観光行動が人気を博すようになってきた。近年は、アニメツーリズムやゲームなどのヴァーチャルな物語の舞台を訪れて楽しむ観光行動のことを聖地巡礼と呼ぶことが一般的に定着している。創作されたストーリーであっても、宗教的な意味合いの強い聖地巡礼や、歴史上の出来事、伝説であろうと、物語の世界観を疑似的に体験しようとするコンテンツツーリズムの目的は共通している。

マストツーリズムからオルタナティブツーリズムへと変容した観光者の価値観は、モノがすぐにコモディティ化してしまうようになった消費社会の市場の変化の時代と連動しており、物質的な豊かさよりも心の豊かさに興味に向いている人々にとっては、観光はますます人気の高い余暇の消費活動である。旅は非日常的な体験を求める経験的消費であるが、近年では、自分の日常とは違う生活を送る人々の暮らしを垣間見る異日常を経験する旅も注目されている。地域独自の資源を生かした着地型観光や、地域文化を深く味わうスモールツーリズムはますます人気である。

一方、観光地となる地方都市から見れば、観光振興は地域の経済戦略の一つであり、まちづくりの活動でもある。近代化のプロセスでインフラ整備が進むにつれて、地方の労働人口は産業と経済の中心である都市部へと流出していった。結果、こんにちでは少子高齢化現象の流れを止めることができず、跡継ぎのいない商店街はシャッターが閉じた店舗が目立ち、空き家の増加と、血縁や地縁コミュニティの弱体化、それらによる産業への打撃は全国で深刻な課題となっている。地域外の人々を観光誘致することは、地方都市にとっては「外貨」獲得の戦略であり、まちづくりと観光を切り離して考えることはできなくなっている。コンテンツツーリズムの導入は、観光を受け入れる地域にとっては経済活性化の手法でもあり、地域行政が介入し、企業や地域住民との協働によってコンテンツ・ファンの観光誘致を試みようとする例は跡を絶たない。その一方で、コンテンツ・フ

ファンに喜ばれるような観光地を創りが、必ずしも地域住民が住みたいまちづくりと一致するという
ことではないために、両者の利害を一致させつつ成功させることは必ずしも簡単ではない。

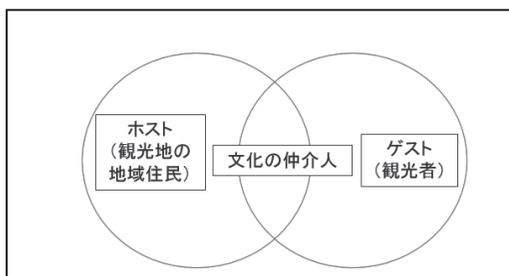
3 観光とローカル・アイデンティティ

近代化による先進諸国の産業・経済の発展に伴って、先進国では余暇の消費に観光旅行がますます
人気を博すようになっていった。初期の観光研究グループのヴァレン・スミスらがまとめた
Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism. (邦題『ホスト・アンド・ゲスト—観光人類学とは
何か—』市野澤潤平、東賢太郎、橋本和也監訳) は、グローバルな「格差」を前提として、観光地
に住むホストと観光者であるゲストの相互関係について考察している (Smith 1989)。

観光開発を巡る経済と権力格差への批判には、内発的發展論 (endogenous development) がある。
先進国による開発によって大勢の観光者が後進国に押し寄せることでは、環境破壊や文化破壊が問
題視されている、という文脈で主に論じられてきた。スウェーデンのダグ・ハマースホルド財団 (Dag
Hammarskjöld Foundation) が1975年国連経済特別総会報告で、経済成長主義への疑問と、「もう一
つの発展」を投げかけた。石森秀三は、鶴見和子の内発的發展論 (鶴見 1996) をひきながら、内
発的観光開発と自立的観光 (石森 2001) の提案を行った。それはこんにちの日本のエコツーリズム、
持続可能な観光についての基本的な考え方となっている。地域資源の掘り起こしを行うことでは、
地域文化や資源として地元では気づかれていなかったようなものを再発見して観光資源に転換させ
ることで、里山資本主義 (藻谷 2013) のような地域イノベーションが起きたり、それにより地域
住民のローカル・アイデンティティが再構築されることがある。

1. ヌーネットスは、観光を受け入れるホスト文化、あるいはローカル文化保持者と、そこに来ては去る (come
and go) ゲストの文化、あるいはツーリスト文化のコンフリクトについて指摘し、観光には両者の文化を
理解して仲介役を果たす人が重要だとしている (Nuñez 1989)。ナッシュはそれを文化の仲介者 (culture
brokers) と呼んでいる。古典的な議論では、ホストとゲストという二項対立図式の仲介をする「文化の仲
介者」が、図1のような関係を作りだしているのだが、こんにちの「持続可能な地域づくり」を前提とした
内発的観光開発と自立的観光を目指す着地型観光のとりくみと、体験や交流を通じた経験価値を求めやっ
てくる観光者との間には、このような明確な線引きや役割がわかりにくいことがある。観光のステークホ
ルダーの関係性は二十一世紀に向かって徐々に多様性をおびてきて、近年のコンテンツツーリズムにおい
ては、ホスト&ゲストと一緒に創り上げる価値共創型の事例もある (山村 2016)。本研究の事例の倉敷市
真備町におけるコンテンツツーリズムでも、地域住民や行政担当者が同時にコンテンツのファンであったり、
運営しながら観光者として楽しんだり、観光者が運営側に新しい遊び方を提案したり、明らかに運営
側にいるはずの企業関係者がゲストとして参加するなど、関係性の線引きが曖昧かつ多様な文化的交流が
顕在化している。

図1. 「ホストとゲストと文化の仲介人の関係性」



出典：Smith、Valene L. *Hosts and Guests : The Anthropology of Tourism*(1989)を参考に筆者作成。

4 倉敷市真備町岡田

フィールドワークは2015年7月から2016年11月まで、観光まちづくりとコンテンツツーリズムのイベント運営に携わる行政、地域住民関係者のインタビューとイベントの参与観察によるコンテンツ・ファンの人々に対して断続的に行ってきた。

岡山県倉敷市真備町は、総人口約23,000人、約44km²のベッドタウンで、2005年のいわゆる平成の大合併により吉備郡真備町が倉敷市の傘下に入って現在に至る。町の東側には岡山県の三大河川の一つである高梁川が南北に流れ、その支流の小田川が町の中央部に東西に流れて高梁川に合流している。これらの一級河川を軸に真備平野が拡がり、町の4割は住宅や田畑、河川などの平野部、残りの約6割は山林などの、自然豊かな地域でありながらも市の中心部へは10km足らずという位置にある。

真備という地名は、奈良時代の豪族で、遣唐使として派遣された吉備真備（きびのまきび）の名に由来し、弥生時代の早期から農業生産力を発展させ、古代吉備国の有力な一翼となっていった。平安、鎌倉期には武士たちによって覇権が争われ、江戸時代には1万石の外様大名である岡田藩が、明治維新後の藩籍奉還まで255年にわたってこの地域を治めていた。1900年の行政区画で発足した吉備郡は、町村単位で倉敷市、総社市、倉敷市、吉備中央町に分かれて編入し、2005年に消滅した（小野他 2016）。1893年の「明治の大洪水」の後の堤防大改修以前には、この地域では高梁川の氾濫による水害が歴史的に繰り返された記録に残っている。そのため、真備町に古くから住む人々は高梁川から少し距離がある高台の農村部の集落で、最寄り駅のJR清音駅から徒歩で40分以上かかる。新興住宅地エリアは、川にも近い国道や県道、鉄道沿線の近くにあり、コンビニや大手チェーン店の並びにも徒歩圏にある。真備町から20キロほど南の倉敷市の水島エリアは、高度成長期に西日本有数の工業基地へと発展していったために、水島の企業に勤務するサラリーマンのベッドタウンとして好適地ということで、昭和の時代に人口が急増していった。

5 横溝正史疎開宅

倉敷市真備町岡田には、探偵小説家横溝正史（1902～1981）が東京の戦禍と食糧難を避けて1945年～1948年まで疎開生活をしたという横溝正史疎開宅がある。疎開していた頃の家族写真や作家江

戸川乱歩との記念写真があったり、執筆していた部屋が無料で公開されている。保存のために真備町が買い上げて2002年に公開となった。

横溝は、父親が岡山の出身であったために、親戚縁者を頼ってこの家と畑を借りた。戦争中は探偵小説の発表は制限されていたために、横溝の作家活動が制限されていたこともあり、この家で書きためていた名作や長編作品は多く、推理小説の出版が自由化されると続々と発表した。横溝の探偵作品の特徴は、論理的にトリックを暴く欧米的な本格推理小説がベースにありながら、ストーリーの世界観は前近代の日本の土俗的なもの、閉鎖的な村の因習にしばられた人間関係が事件の背後に生々しく描き出されるという横溝の作風で、強い個性の登場人物と相まって横溝ファンを魅了する。横溝が前近代と近代が交錯する日本文化を事件の背景に描こうという着想に至った経緯は、岡田村で出会った元教員の加藤一（ひとし）氏に日々教えてもらった世俗的な情報、岡山地域の歴史、文化や人情風俗などであると、横溝は繰り返し振り返って書き綴っている（横溝 1993）。『本陣殺人事件』『獄門島』『八つ墓村』などの岡田村で書かれた名作には、加藤氏から聞いた岡上で起きた事件や閉鎖的な村の因習、農村の風物詩などの話に基づいて、真備町から見える景色や、近所の寺やほこらなどもストーリーの中で利用されている。名探偵金田一耕助が初めて登場する『本陣殺人事件』は、真備町が事件の舞台である。岡山を舞台にした作品が多く、映画化やテレビドラマの撮影も岡上で何度も行われている。

横溝正史疎開宅を実際に管理しているのは、横溝正史疎開宅管理組合のボランティアの人々である。この場所が旧吉備郡岡田村大字岡田字桜という住所であったため、組合メンバーは旧桜部落の、かつて横溝家と近所づきあいがあった地域住民が中心に、家や庭の手入れ、展示物の管理をしたり、撮影やイベントの運営の対応などをしたりしている。横溝文学のファンはこの疎開宅を「聖地」として目指してやってくるが、桜の人たちが昔話を聞かせることがファンにとって最高のもてなしとなる。

6 『巡・金田一耕助の小径』と岡田村

元岡田村がある真備町の玄関駅は、JR倉敷駅から一つめのJR清音駅である。真備町を舞台とした『本陣殺人事件』は、岡田村で執筆された戦後の本格的な長編推理小説である。そしてあの有名な探偵「金田一耕助」が登場する最初の作品である。作品の中に、金田一耕助が「11月27日に清__駅に降り立つ」という記述があることから、毎年11月最後の週末にはJR清音駅から小説のゆかりの場所に立ち寄りながら、横溝正史疎開宅を目指して真備町を歩くイベント『巡・金田一耕助の小径』が開催される。2009年から倉敷市観光課が主催しており、運営は「オブザーバー」と呼ばれている倉敷内外の岡山県の横溝ファンと、真備町が倉敷市に編入される前からまちづくりの活動をしていた「岡田まちづくり協議会」のボランティアの住民が中心となっている。出版物や映像等の著作権を持つ横溝正史の家族と、株式会社KADOKAWAから、イベント内容については毎年許可を得て、参加者向けのノベルティなどが提供される。

全国だけでなく海外からも横溝文学ファンが真備町を訪れ、金田一耕助、または横溝小説の登場

人物に扮して旧岡田村を歩く。清音駅を出て駅前道路を歩くと高梁川の堤防に突き当たり、橋を渡ったところが真備町川辺と呼ばれる地域で、『本陣殺人事件』の舞台である。旧山陽道の川辺宿があったところで、殺人事件の「本陣一柳家」は本陣の建物であったが、実物は「明治の大洪水」で流失してしまい、宿場町の面影は石碑によりかろうじて伺い知ることができる。



写真1. 真備町を歩く金田一耕助のコスプレイヤーたち(筆者撮影)

現在は川辺団地と呼ばれる振興住宅地で、住人は家から出てきて庭先にいすを置いて見物したり、道に出てコスプレイヤーの行列に手を振りながら見物したり、子供たちははしゃぎながら途中一緒に歩くなど、さながら地元の祭りのように、町が劇場空間に転じる。とりわけ特徴的なのは、住人がすれ違いざまのコスプレイヤーに挨拶をする点で、「こんにちは」、「いらっしやい」、「ご苦労様」、などの言葉掛けがごく自然に出てくる。地元住民からはコスプレイヤーが歩いている主旨が理解され、そのことが好意的に受け止められていることがわかる。

「岡田まちづくり協議会」の人々は、イベントの初回から、コースの途中で小説のワンシーンを寸劇で演じてみせており、コスプレイヤーの楽しみのスポットとなっている。協議会の人々が、横溝ファンが遠方から岡田を訪れる人々をもてなす方法として、倉敷市役所に自ら申し出たとのことであった。



写真2. 地元住民による寸劇(筆者撮影)

「もてなし」は岡田の人々から頻繁に聞かれる言葉でもある。横溝正史がかつて食べるものもろくにならないまま戦禍の東京から到着した明るる日に、疎開宅の雨戸を開けたら野菜が一杯おいてあつ

た、という話を横溝も繰り返し記述している。疲れきっていた横溝家の人々への近隣住民の気遣いであった。以後、疎開生活の3年が終わっても暖かい交流が続いている。「お客様には暖かくおもてなしをするのが岡田の人間」と、ボランティア住民は自分たちの行動や演出を地域性に還元して語る。疎開宅のある桜の人々は岡田の中でも prestige があり、いわば「聖地の守人」として振舞っている。疎開宅には琴の演奏が準備され、倉敷市市長が金田一耕助のコスプレをして登場するのもこの場所である。疎開宅の案内が終わったら、夜の交流会の食事を提供する役でもある。コスプレイヤーたちが到着するのを見ると、リピーターのファンも初参加も関係なく、建物の中から「おかえり」という声掛けをする。コンテンツツーリズムを通じてある種のヴァーチャルなコミュニティが成立しているようである。

イベントの主催者である倉敷市は、このイベントについてウェブサイト1ページ以外に宣伝は行なわない。主にはSNSなどクチコミを通じて拡がるため、ファン同士もハンドルネームで呼び合っていることが頻繁である。東京などの都市部のファンは、コミックマーケットで金田一耕助のサークル活動をするなど、一部重複して活動をしている人もいるようだが、多くは互いに普段の個人はよく知らないが、イベントで何度か会ったことがあるとか、twitter上で交流しているなどの緩い関係のようである。1年に一度のこのイベントで、遅くまで飲食を共にしたり、他の横溝作品の舞台となった岡山と一緒に旅をしたりするなどを通じて、親交を深めているようである。

7 コンテンツツーリズムと地域のダイナミズム

真備町が倉敷市に編入されたときに、行政が地域振興のために会議を持ったときに、「真備の特産品はタケノコしかない」と住民は言っていたという。また岡田地区の人々と話をしていると、「子供の頃、横溝作品は怖くて本はあったけど手を出したことが無かった」、「無残な殺人があった村の人間だと思われたくないと思っていた」と何度も聞くことがあった。すでに横溝正史疎開宅は真備町の管理下におかれていて、横溝ファンが個人ベースで時折やってくることはあったが、観光目的で活用されていたわけではなかった。倉敷市行政とのまちづくり会議の中で、地域資源としての横溝正史疎開宅が再発見され、地元の横溝ファンが自然と集まり、行政や住民を束ねて全国のファンを呼び寄せられるような受け入れ体制を作った。住民が嫌悪感を持っていた作品の世界観も、『聖地巡礼』にやってくるファンが喜んでる姿を見ることで、聖地の守人としてのローカル・アイデンティティと、観光者をもてなす地域コミュニティの再構築がなされたのだと思われる。

コンテンツツーリズムは、行政や企業が強く先導したり、ファンの強すぎる思いが過過ぎたり、営利目的のコンサルタントに任せきってしまったりで地域住民の気持ちとズレが生じて、観光がまちづくりとうまくつながらない事例が時々聞かれる。本事例は、行政や地元住民をよく知るファンが陰のアドバイザーとなって「文化の仲介人」として機能し、コンテンツ・ファンを喜ばせる提案をするなどのコンテンツにかんするサービス・リテラシー(八巻 2014/2013)の管理を行い、行政が安全で健全な運営をするだけでなく、権利者や地元住民との窓口として機能し、地元住民が自らの町にほこりを持って運営に主体的に関わるなど、バランスの良い観光まちづくりが実践され

ている例である。コンテンツツーリズムへの住民参加を通じた地域振興の成功は、それを通じた地域住民のローカル・アイデンティティの変容、コミュニティの再構築などのダイナミズムを伴ってこそ観光まちづくりの活動となり得るのではないだろうか。

参考文献

Graburn, Nelson (1989) "Tourism: The Sacred Journey." in *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. (1989) Philadelphia. University of Pennsylvania Press, pp.21-36.

石森秀三 (2001) 「内発的観光開発と自立的観光」石森秀三・西山徳明編『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究：国立民族学博物館調査報告21』国立民族学博物館。

藻谷浩介・NHK広島取材班 (2013) 『里山資本主義－日本経済は「安心の原理」で動く』角川書店。

Nash, Denisson (1989) "Tourism as a Form of Imperialism," in Smith, V. (ed.), *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism* (1989) Philadelphia. University of Pennsylvania Press, pp.37-52.

Nuñez, Theron (1989) "Touristic Studies in Anthropological Perspective," in Smith, V. (ed.), *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism* (1989) Philadelphia. University of Pennsylvania Press, pp.265-279.

小野克正・加藤満宏・中山薫 (2016) 『真備町（倉敷市）歩けば』日本文教出版。

Smith, Valene L. (1989) *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. (市野澤潤平・東賢太朗・橋本和也監訳 (2018) 『ホスト・アンド・ゲスト－観光人類学とは何か－』ミネルヴァ書房)。

鶴見和子 (1996) 『内発的発展論の展開』筑摩書房。

山村高淑 (2016) 「「尾道」における価値共創の可能性：コンテンツ・ツーリズム振興の観点から」池ノ上真一・花岡拓郎・石黒侑介・石森秀三編『尾道型デスティネーション・マネジメントって何？～多様な地域遺産を生かす観光まちづくり戦略』CATS叢書第10号：pp.109-119、北海道大学観光学口頭研究センター。

横溝正史 (1993) 『金田一耕助のモノローグ』角川文庫。

八巻恵子 (2013) 『国際線客室乗務員の仕事：サービスの経営人類学』東方出版。

(2014) 「サービス・リテラシーとは何か－サービスの意味体系－」広島大学マネジメント研究センター編『連携による知の創造：社会人大学院の新たな試み』pp.138-140. 白桃書房。